

編集後記

■編集委員

委員長

藤 田 郁 代

副委員長

立 石 雅 子

今 井 智 子

内 田 信 也

宇 野 彰 準

勝 木 準

倉 内 紀 子

城 間 将 江 子

鈴 木 恵 子

関 啓 子

玉 井 ふ み

深 浦 順 一

矢 守 麻 奈

今年は春の到来が遅れましたが、その後天候は安定し、碧空に新緑が映える美しい日々が続きました。この時期、巷間では STAP 細胞に関する論文への疑惑が大きく取り上げられ、科学者に対する人々の眼差しが一段と厳しさを増したように思います。

大学院教育に携わっている筆者は、STAP 細胞論文を書いた若手研究者の記者会見を TV で見ながら、学生が研究における倫理性や科学性を確実に身につけ実践できるようになるまでの責任の重さを改めて痛感しました。研究活動における不正行為には、捏造、改ざん、盗用、重複発表などがあり、研究成果がどのようなものであれ、不正行為がなされた場合、その研究の科学性は否定されます。研究が科学的であることは、客観的証拠に依拠している、再現性がある、理論や仮説がある、推論に論理的整合性があるなどを条件とします。本誌では査読を通して、論文にこれらの問題がないことを確認していますが、投稿者におかれましても慎重な自己確認をお願いします。

今号には、失語症・高次脳機能障害研究の第一人者で言語聴覚士である関啓子氏が自らの体験についてまとめられた「高次脳機能障害を体験して—科学的考察—」（症例報告）が掲載されています。関啓子氏は5年前に右 ACA・MCA 領域の脳梗塞によって発話障害、左無視、半側身体失認などの高次脳機能障害を発症されましたが、専門的知識を駆使した自主トレーニングと長期的リハビリテーションにより、見事な回復を遂げられました。高次脳機能障害を“主体者”として内側から分析された本論文は、普段、外側から高次脳機能障害を見ている者にとって非常に学ぶことが多い内容となっています。通常の体験記ではなく、症例報告としての発表を望まれたのはご本人であり、ご自分の体験を科学的に振り返り、臨床や研究に寄与したいという強い思いがあつてのことでした。高次脳機能障害臨床に携わるすべての方に一読していただきたい論文です。

今号には症例報告のほか、聴覚障害と発達障害の臨床に関する総説2編、嚥下障害と失書をテーマとした原著論文2編、小児構音障害臨床の実態調査報告、兵庫県言語聴覚士の実態調査報告が掲載されており、言語聴覚障害学分野の研究と臨床の動向を一望できる内容となっています。 (藤田郁代)

言語聴覚研究(第11巻 第2号)2014年6月15日発行

Japanese Journal of Speech, Language, and Hearing Research

編集・発行：一般社団法人 日本言語聴覚士協会(会長：深浦順一)

〒162-0814 東京都新宿区新小川町 6-29 アクロポリス東京 9 階

(☎ 03-6280-7628 FAX 03-6280-7629) <http://www.jaslht.or.jp/>

Published by Japanese Association of Speech-Language-Hearing Therapists (JAS), Acropolis Tokyo 9F, 6-29 Shinogawamachi, Shinjuku-ku, Tokyo, 162-0814, Japan

©2014, Printed in Japan

制作・発売：(株)医学書院(代表：金原 優) <http://www.igaku-shoin.co.jp/>

〒113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23(振替口座 00170-9-96693 番)

販売部直通 ☎ 03-3817-5659・5660(FAX 03-3815-7804)

印刷所 (株)アイワード ☎ 011-241-9341(FAX 011-207-6178)

広告申込所 (株)文京メディカル ☎ 03-3817-8036(FAX 03-3817-8044)